

## 第2次安城市市民協働推進計画策定のための 第2回 協働井戸端会議 結果概要

第2回 協働井戸端会議は、下記のようなプログラムで開催しました。その結果概要は次ページ以降のとおりです。

■日時：平成29年3月25日（土）13：30～

■場所：安城市民交流センター 多目的ホール

### 今日のワークショップ(WS)のねらいは…

- 第1回協働井戸端会議の経過と結果を振り返る。
- 2人の講師のお話から、これからの協働のヒントとなる考えや事例を学ぶ
- 第1回協働井戸端会議の結果と講演を踏まえながら、安城における今後の協働の方向性（施策アイデア）について話し合う。

### 【プログラム】

- 13:30 **1. 開会・あいさつ**  
**2. 本日のプログラム説明**

- 13:35 **3. 前回の振り返り**

#### 第1部 講演会 「これからの協働と活動団体運営のカタチ」

- 13:45 **4. ミニ講演①**

テーマ：「事例から学ぶ—志縁と地縁、多様な主体による課題解決型の協働」

講師：岡本一美さん（NPO法人地域福祉サポートちた 代表理事）

- 14:20 **5. ミニ講演②**

テーマ：「成果志向型のまちづくり—これからの自立した市民団体のあり方」

講師：斉藤順子さん（コミュニティ・ユース・バンク momo 事務局スタッフ）

- 14:55 **休憩**

- 15:00 **6. 共有タイム**

- 15:10 **7. 質疑応答タイム**

#### 第2部 グループワーク

- 15:25 **8. あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)を出し合おう！**

- 16:10 **9. 発表タイム**

- 16:30 **10. 事務連絡・閉会**



わくわくちゃん

と センタくん

## 第1部 講演会 「これからの協働と活動団体運営のカタチ」

第1部では、NPO法人地域福祉サポートちた代表理事の岡本一美さん、コミュニティ・ユース・バンクmomom事務局スタッフの斉藤順子さんをお招きし、これからの安城の協働のあり方を考えるにあたって参考となる事例や考え方をお話しいただきました。



### ミニ講演1 テーマ:「事例から学ぶ—志縁と地縁、多様な主体による課題解決型の協働」 講師:岡本一美さん (NPO法人地域福祉サポートちた 代表理事)



#### ●略歴

2001年より、愛知県知多市にあるNPO法人地域福祉サポートちたスタッフとして活動。NPOアドバイザーやNPO人材育成事業、NPO立ち上げ支援に携わる。2008年、「知多地域成年後見センター」開所に伴い、事務局長就任。2010年、代表理事就任、現在、協働ネットワークの場づくりを推進中。

#### ●専門、得意な分野

法人立ち上げ支援・課題解決のための連携の場づくり・ファシリテート

#### はじめに

知多市に事務所がありますNPO法人、地域福祉サポート知多で3代目の代表を務めております岡本と申します。よろしくお願ひします。知多地域の実践についてお話しさせていただきます。

本日、私にいただきましたお題は、『志縁と地縁、多様な主体による課題解決型の協働』ということですが、私たちのようなNPO法人、市民活動団体、ボランティア団体がミッション、志でつながっているのが志縁団体です。地縁団体は住んでいる地域のエリア内にあるコミュニティでつながって活動している団体ですが、いろいろな形のチーム、グループ、市民がつながって一つの問題に向かって一緒になって働いています。こうした話をさせていただきます。

分かりやすい例として、東浦町にありますNPO法人「絆」のお話をいたします。「絆」は、介護保険事業、障害者総合支援法に基づく事業を行っています。90年代に、困った時はお互い様という無償のボランティアでは長く続けられないので、少しお金をいただく形で始まった団体です。20年以上に渡って地域で活躍している団体です。

同じ東浦町に森岡台団地という自治区があり、高齢化率が非常に高いのですが、住民主体でもっと暮らしやすくするように、また、5年後、10年後のために今のうちから何をすべきかということをお話しさせていただきます。

#### 知多型地域包括ケア

介護保険法は2000年施行なのですが、知多地域はその10年前、東海市で佐々木幸雄さんという方が、自身の助けて欲しかった体験から、定年後、60歳で家事援助の有償ボランティアを始められました。今、介護保険改正に伴う生活支援体制整備事業が各自治体で始まっていますが、訪問型、通所型の支援サービスが既に1990年代にこの地域にはあったということです。こういったことは、仙台や横浜、神戸にもこういった取組みが早い時期からありました。「困った時はお互いさま」というフレーズで団体がつながり、37団体、その他の地域で22団体がつながっています。

超高齢化に入った日本は世界最速の高齢化となっています。4人にひとりが65歳以上ですが、医学関係者の中からは、75歳以上を高齢者と呼ぼうという提言がなされました。しかし、地域で最も動いているのは68歳の方々か

ら80歳くらいの方で、さらに高齢の方々も地域の活動を担っておられます。NPOでも最高齢のケアマネさんは96歳です。

そんな中、国は地域包括ケアと言っています。医療と福祉だけではできないので、地域でなんとかやってもらえませんかと厚生労働省が言っています。私たちはその地域包括ケアという言葉に知多版と付けています。その中身は、困っているのは高齢者だけですか？ 元気な高齢者はいつまでも地域に貢献されています。それで助かっているのは高齢者だけではなく、赤ちゃんも子育て中のママも、学校に行き渋っている子どもたちも、ひきこもっている若者たちなども、こういった人たちのお手伝いをしてくださっています。

介護保険を何とかしようという話ではなく、地域で困ったという状況があったら、お互いさまで助け合うという地域づくりをしませんかということで、知多型地域包括ケア、0歳から100歳の地域包括ケアのまちづくりというところでやっています。

どのような仕組みでやっているのかというと、NPOが盛んな地域ですので、NPO中心に福祉的なことをやってきました。青年後見の仕組みもNPOでできています。地縁の取り組みも非常に活発で、ご近所で何とかし合おうということからお助け会というものをつくって、自分のところのごみを出すついでに隣の独り暮らしの高齢者のごみも一緒に出しますよというものもあります。また、電球を取り換えることができない高齢者のところに行って手間賃程度でそういったことをする取り組みもあります。

## 2014東浦町円卓会議

独居高齢者を地域で、在宅で支える取り組みが進んでいる中、東浦町のNPO法人「絆」は「困った時はお互い様」のフレーズで地域づくりをやっておられます。NPOの想いやこんな仕組みで続けられるといったことをこれからのまちづくりに活かそうということで、サポート知多で仕掛けをさせていただきました。NPO「絆」を中心にどのような人たちが集まれば東浦がもっと良くなるかということを考えるため、地域円卓会議というものをやらせていただきました。

もっと進化するためには、NPOがたくさんあっても無理で、住民全体、地域全体に広めるためにどうすべきかを円卓会議で話し合った結果、多職種連携ボランティアチーム「チームにじ」というものをつくり、高齢者、関係機関が集まるイベント「シルバークフェスタ」を開催しました。円卓会議の様子はサポート知多のホームページにもあり、円卓会議の進め方の冊子もあります。

「チームにじ」のメンバーは民生児童委員協議会の長、東浦サロン連絡会の長、訪問看護ステーションの看護師さん、地域包括支援センターの職員さん、リサイクル企業となっています。リサイクル企業は、自分で車を使って移動できない人が増えてしまった地域に移動販売車を出している企業です。これらの方々とNPO法人「絆」、社協、町の福祉課にも入っていただき、いろいろな話し合いをしました。

10年前、重度心身障害者の方が独り暮らしをしたいと申し出られて、当時、我がままだと言われたものの、その方のアパート暮らしを何十人ものボランティアが支えたという話しが円卓会議で出ました。円卓会議のメンバーの半分がその時のボランティアだったということでした。

地域包括ケアということが出る以前に、すでにこの地域には包括ケアがあったということです。これからもっとそういう人が増える中、何に取り組むべきかを話し合いました。

その時の円卓会議に、たまたまその年に母親を亡くされた方がいたのですが、その方は訪問介護、家族介護をされていて、その経験をお話しされました。具体的な内容があったので、深く話し合いをすることができました。3回目の円卓会議で窓口は行政だけではなく、民間側にもあったほうがよいのではという意見が出ました。話の中で、困った時、直ちに行政の窓口に行くとは限らないので、地域の中にあれば気軽に相談できるのではということになりました。

その時の円卓会議は二重円卓というもので、一重円卓のメンバーは決まっていますが、外側の二重円卓は誰でも参加できるようにしました。その中で生れたのが「チームにじ」です。「絆」の自主映画「妻の病」の上映に協力してくださり、上映会は大成功しました。このことから、「チームにじ」で何かできるのではと考えたのが、シルバークフェスタの開催です。

## シルバークフェスタの開催

シルバークフェスタの代表は元、子育て支援センター長だった方だったので、子育てフェスタの高齢者版ができないかということで提案され、この機会を地域包括ケアの啓発にもしたいと考えました。フェスタは自費で外から全くお

金を入れない形であったにも関わらず、500人規模で開催されました。1回目が好評だったので、今回2回目の開催となりましたが、1回目の参加者がボランティアとして、2回目のフェスタに参加してくれました。フェスタでは、老人クラブの発表の場は満席でした。

地域包括ケアは決して高齢者だけのものではないということで、イベントのタイトルを子どもさんが来ても楽しめるように「0歳から100歳みんなで作るあしたの東浦」と皆さんがつけてくださいました。

イベントでは、保健センターがコグニサイズを披露したり、訪問看護センターが介護予防体操をやってくださったり、地域包括支援センターが何でも相談を行ったりと、いろいろありましたが、中でも面白かったのが、70代、80代の方が新婦のドレスを着て、町の職員さんや社協の職員さんでイケメンの方をお相手に写真を撮る「変身思い出写真館」というイベントがあり、大いに盛り上がりました。こういった楽しみが日常にあることは、非常に大事です。こういった内容は東浦の「絆」がやってみえることをこのイベントに持ち込んでもらったものです。

イベントは盛り上がりましたが、一番の目的は介護予防の啓発です。自助、互助の啓発です。自分自身をできるだけ他人のお世話にならないようにするために、もっと外に出て人と交わって地域活動に参加することが、一番の介護予防になりますよということです。PPK（ピンピンコロリ）、昨日まで現役それがよいのです。会社には定年がありますが、地域活動に定年はありません。楽しいな、面白いな、やりたいなといった意志があれば、この世界はやり続けることができるのです。1年に1回のイベントで啓発して、認知症にも広めていければ良いと思いますが、こちらは、イベントではない形が良いかもしれません。

## 現在、チームにじは、

「コミュニティ・ユース・バンクmomo」の代表で木村さんという方が、愛知コミュニティ財団というのをやられているのですが、こちらは皆さんの寄付を基本に市民活動、地域活動に資金的な支援をしながら、もっとよくなるための知恵をもらったりする伴走支援型の取り組みをされています。昨年、「知多型0歳から100歳のまちづくり基金」というものを愛知コミュニティ財団の中に設けさせてもらいました。おかげさまで、117万円集まりました。

コレクティブインパクト、これは複数の機関で1つの課題解決に向き合うということですが、そういったものに助成をするという枠で「チームにじ」が50万円をいただきました。

現在、「チームにじ」は具体的活動として、東浦で最も高齢化率の高い地区に限定して、アンケート調査をしながら円卓会議を進め、小さいエリアで住民の気持ちを聴く、やれることを聴く、地域資源を発掘しマップ化する、そして、どんなことをやればもっと皆で進められるかといったことをやっています。この地区は森岡台自治区で、1,100世帯あり、東浦町の高齢化率が24.0パーセントなのに対し、41.3パーセントの高齢化率となっています。一時期に同時に入ってきた地区というのは、ある時期、一気にこのような率になります。

チームのメンバーの中にはこの地区の方が3人いますが、この方々がこの地区をどうにかしないといけないという想いからチームにこの地区への取り組みをお願いしました。

このことから、住民歴書型アンケート調査というものが始まりつつあります。現在、やっている段階ですが、これまでの福祉の地域づくりは、困っているであろうどなたかは参加していない状態で、専門機関である医療職、福祉職、行政職、社協、ボランティアが今、居ないその人をどのように支えるかという地域ケア会議でやっていました。これからの人口減少社会で、誰かが支える側、誰かが支えられる側で分けていてよいのでしょうか。

たとえ認知症であっても、たとえひきこもりであっても、たとえいじめられていて学校に行けなくなったお子さんであっても、たとえ子育て中のママであっても、たとえ赤ちゃんであっても、必ず誰かの役に立つのです。そういった考えからできたのが住民歴書アンケートです。何に困っていますかとは聴きません。あなたのできることは何ですか、あなたの好きなことは何ですか、あなたを尋ねてくる人はありますか、あなたが尋ねる地域のお家はありますか、こういったことを聴くことで支え合いの地域づくりを進めていきたいと思います。これは、広島酒井保さんという方が考案されました。この方を4月の8日、知多にお呼びし、翌日、東浦のこの地区に入ってくださいます。

## 地域円卓会議

サポート知多としては、地域円卓会議が有効と考えています。これ以外にも円卓会議から始まった地域のネットワークづくりの事例が知多地域にいくつかあります。円卓会議は、一人ひとりの実績や人脈や持っていらっしゃる情報などを出し合って、地域の動きをつくっていく場だと思っています。地域によってやり方は様々だと思いますが、知

多では住民の力を出していただく形でやっています。昨日、日本福祉大学の先生が、国はお金がなくなっていくので、今まで政府がやっていたことを住民に押し付けようとしていると言われていましたが、私はそうは思いません。地域は国が言う前から既に動いています。目の前に困っている人がいたら捨て置くことができますか。気が付いた人から次から次へと進めています。もっと進めやすくするための方策を考え、市町ごとの小さいエリアに絞っていくことが良いと思います。

**ミニ講演2 テーマ:「成果志向型のまちづくり—これからの自立した市民団体のあり方」**  
**講師: 齊藤順子さん(コミュニティ・ユース・バンク momo 事務局スタッフ)**



●略歴

大学時代に野宿労働者支援に関わったことがきっかけでNGO/NPOに関心を持つ。大学卒業後は、名古屋NGOセンターの人材育成研修「NGOのスタッフになりたい人のための研修」を受講し、それが縁で、国際協力NGO関係の団体で計6年半勤務。2011年8月より現職。事務局スタッフとして、持続可能な地域づくりに奔走する団体や事業家さんを応援中。

●専門、得意な分野

NPO等運営支援

### はじめに

コミュニティ・ユース・バンクmomoの齊藤です。『成果志向型のまちづくり、これからの自立した市民活動のあり方』というお題をいただきましたので、それを基にお話しを進めたいと思います。

momoは、「こんな街や未来にしてほしい」という想いが込められた市民のお金を、地域に根ざした社会性の高い事業に届けることにより、出資する人、融資を受ける人、momoに関わるすべての人が、「お金の地産地消」を通してつながり、次世代を担う若者たちが自分の住みたい街や未来を選択していくことを目的としています。私たちのような想いや取り組みを全国各地に広げることで、世界の貧困や紛争、環境破壊に加担せず、豊かな未来を実感できる社会をつくることを目指します。簡単に言いますと、わたしたちの暮らす街で子や孫がずっと暮らしていけるように、お金を使ってできることを考えている団体です。

### NPOバンクが生まれた背景

私たちのような想いを持って活動している団体をNPOバンクといいます。このような団体が全国に14あります。立ち上げて今年で11年目になり、東海地方では初のNPOバンクとなっています。

私たちがどうしてNPOバンクを立ち上げたかと言いますと、全国の金融機関の預貸率、これは銀行の預金に対しどれだけ融資に回っているかを示すものですが、2013年には50パーセントを下回っています。本来、私たちが預けたお金はぐるぐる回っているはずなのですが、半分しか回っていない状況となっています。これにはいろいろと原因がありますが、今の時代、老後のために貯めておこうということで預金が増えているのですが、開業率が廃業率を下回っていることで貸出先は着実に減っています。後の半分は、国債を買ったりなどで、地域の外に出ています。

一方、企業が減っている中、NPO法人の数は増えており、NPOに融資する件数は増えています。これは、2015年10月にNPO法人も信用保証制度が利用できるようになったことと、NPO法人は貸し倒れするところが少ないということもあるのですが、現状、NPO法人で銀行からお金を借りて事業をしているところは少ないと思います。アンケートの結果でも、個人から借りているところが70パーセントとなっていますので、まだまだ、銀行から借りているところは少なく、銀行は貸出先に困っているというギャップがみてとれます。

愛知県は2040年に75歳以上の人口は17.6パーセントになります。そうすると、医療や介護にお金が必要になったり、そういった活動も必要になるので、行政だけでそれを担うことが難しくなってきます。医療、介護のニーズが爆発的に増えることで、今は表面化していない医療、介護の問題も増えてくるであろうと予測されています。

愛知県は、10万人当たりのNPO法人数は、全国47都道府県で最も少ない県となっていますので、これからNPO法人をどうやって増やしていこうかということが課題になると考えています。



## 地域内“志金”循環モデル構想

そんな中、m o m oが何を目標しているかと言いますと、地域内“志金”循環モデル構想として、地域の課題解決の重要な担い手となるNPOを、行政だけでなく財団、地域金融機関、地域企業皆で支えてお金を回して、課題解決できる仕組みがつくれぬかということを目指して活動しています。その中で私たちが選んでいるのが、NPOバンクという形態です。

NPOバンクは、一般の方から出資金という形でお金をお預かりして、NPOやソーシャルビジネスと呼ばれる団体に融資をします。もちろん、融資なので返済があり、それをまた別の団体に融資するということになります。現在、543名から4,837万円で、融資総額は14,414万円となっており、今まで10年間で60件の融資をさせていただきました。今のところ貸し倒れは無しということになっています。

NPOの資金源としては、会費・寄付、事業収入、補助・助成、受託収入などがあると思いますが、事業収入、受託収入で主に回している団体であれば融資できるのではないかと仮説のもと、融資を行っています。2012年の愛知県NPO財務分析調査では、多くの団体が事業収入で団体を成り立たせているという結果が出ています。

事業収入が主な資金源である団体がどのようなものかといった例として、私どもが融資しているところですが、岐阜県郡上市にあるNPO法人で、公民館を改修し、そこを拠点として都会からの人に田舎暮らし体験をしてもらい、郡上の良いところを知ってもらい郡上をもっと盛り上げたいという活動を行っています。ここは、宿泊施設なのでサービスを提供しています。

受託収入が主な資金源の例として、NPO法人ふれ愛名古屋という団体があります。ここは身体もなかなか動かせない子どもたちの放課後の居場所として、デイサービスを開設したいということで融資を申し込まれました。これは、制度事業であり、子どもが通ってくればお金が入る仕組みになっていますので、融資という形で応援ができると思いました。

融資なので審査がありますが、3回に区切って審査には時間を掛けます。審査では、皆さんから話しを聴く機会を設けています。質問では理事さんたちだけではなく、職員さんにも30くらいの質問をします。なぜ、時間を掛けるかと言うと、原資は出資金であって出資者に説明責任があるからで、その活動が本当に地域の役に立っているのかということを見ます。それは、出資者が利益を求めず地域を良くしてほしいということで出資しているからです。私たちが最も大切に考えているのは、誰の困りごとのために何をやる事業なのか、そしてそのことがどんな地域の課題解決につながるのかということで、とことんお聴きします。

団体に相関図を描いていただくと自分の団体を中心に描かれる方が多いのですが、それだと自分の団体と関係するところしか見えてこないで、地域課題解決ということであれば、助きたい当事者を中心にして描けば団体の活動が必要なのかということが見えてくると思います。

相関図がなぜ大事かと言うと、資金のご相談をいただく時に、課題の当事者からお金を取ることができないというご相談をいただくことがあります。相関図の中で自分の団体が中心にあるから見えてこないわけで、当事者を中心に置けば当事者を取り巻くステークホルダーたくさん見えてきます。当事者からお金をいただけなくても別のところから対価をいただけるのではないかと、課題解決のために別の団体とも連携できるのではないかと見えてきます。

お金を貸した後がむしろ重要だと思っており、伴走支援ということを掲げています。20代から30代の若者のボランティアスタッフが融資の後、融資先につきまします。そのスタッフがその人の鏡(m o m oレンジャー)となって、本当にそれは必要か、それは誰の困りごとを解決するのかといったことで、頭の中を整理する手伝いをするなどして、その事業に関わっていくことで事業の成長を助けています。

そうやって関わったことをm o m oレンジャーがブログで発信したり、m o m o通信という名称でウェブ上に情報提供したりしています。また、m o m oレンジャーは困っていることを助けられるわけではないので、必要な人を紹介するなどします。例えば、先ほどの田舎暮らし体験のところ、このプログラムで本当に都会から来てくれるのかといった時、m o m oレンジャーが出資者にモニター的なことを呼び掛けたりします。心身障害の子どもたちのところでは、忙しいためにパンフレットやホームページが作れないといった時、m o m oレンジャーがお手伝いしたりします。

## 金融機関と連携、ソーシャルビジネスの支援へ

一方で、地域との連携ということでmomoだけでやっている成果を広めるため、地域金融機関と協調融資をしたり、ソーシャルビジネスサポートあいちとして、ソーシャルビジネス事業者のニーズや課題にワンストップで応えることなどもやっています。

さらに、地域が良くなるとはどういうことかということが見えづらいということがありますので、NPOの社会的価値「見える化」プログラムということをやっています。これは例えば、子どもの笑顔が増えましたといった時、それが地域にどんな影響があるのかということはなかなか説明しづらいものがありますが、金融機関や企業の皆さんにプロボノとして関わっていただき、SROI（ソーシャルリターンオンインベストメント）を測ることをしています。金融機関にとってNPOの活動は分かりにくいと思われているのですが、半年間、関わってもらうことで理解してもらえることとなります。momoにお申し込みいただく融資先の方は、金融機関に断られた人が多いのですが、プロボノプロジェクトに参加されたNPOは2カ所目を開設しようということでしたが、地域金融機関から融資を受けることができました。このように地域金融機関に融資を受けやすくすることも行っています。

「東海ろうきんNPO助成」についてですが、東海労金はNPOに融資する枠組みを持っているものの、なかなかNPOからの申し込みがないということから、もっと融資を申し込めるようなNPOを作ろうというプログラムです。これは、事業に融資するのではなく基盤強化を図るもので、例えば、会費や寄付を集めるにはどうすればよいのだろうと言った時、もっと会費や寄付を集めることができる組織にしましょうとか、中期計画がないのでこの先、どうやって進めてよいのか分からないと言った時、どこをどんなふうに変えていったらよいかなど、基盤強化をした上で、会費なのか、寄付なのか、融資なのかといった選択肢が採れるような基盤を強化しようというものです。

## NPO資金源の多様化と成果の見える化

なぜ、そういうことをするのかというと、今後、高齢化が進む中で、いくつもの壁が出て来た時、行政だけの力だけではそこを下支えすることはできないと思うからです。負のサイクルになっては乗り越えることができないので、それを正のサイクルとするためにNPO側としても、その活動で地域はどう変わるのかといったこと、成果を見えるようにしてそこを支えていくという仕組みに変えていきたいと思っています。

皆さんの日々の活動でも成果はあると思いますが、それを上手く見せていないのだと思いますので、上手く見える化することが大事だと思います。NPOの資金源を多様化していけると応援してもらえる選択肢が増えることとなります。

社会的な流れとして、休眠預金法というのが以前話題になったと思います。これは10年間お金が出し入れされていない口座を今は銀行の収入としています。これを社会活動に使おうという法律が成立しました。法律の中では、重要視されているのが社会全体の波及効果の高いものに使い、それは成果を収めること、成果に係る目標に着目した助成等となっています。

政府も「社会的インパクト評価の推進に向けて」と社会的にインパクトの大きいものにしていきたい想いがあり、成果の見えやすいものにしてほしいとしています。

私たちが成果を見えるようにしようということで「Theory of Change 2020」というものを作成しています。これは、2020年までにどんな成果を上げたいかを数値しているものですが、こうやってペーパーを見せることで支援者を増やす活動もしています。

社会意識に関する世論調査では社会の役に立ちたいと思っている人は7割いるということです。NPOを下支えするインフラは10年前に比べると整いつつあると感じますが、その中で社会の役に立ちたい人が7割いるのでいろいろな人を巻き込んで活動をしていくには、この7割の人たちに向けて自分達の活動が地域には必要なのだということを訴えていけば、NPOの活動は継続していくのかなと思います。

(以上、文責事務局)

## 第2部 グループワーク

第2部では、第1回の協働井戸端会議の結果とミニ講演会の結果を踏まえつつ、あんじょうの協働の今後の方向性（施策アイデア）について、5グループに分かれて意見を出し合い、グループで2～3つの一押し提案を整理しました。

各グループで話し合われた内容は、次のとおりです。



あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)				グループ	A
困っているの掘り起こし	困っていることを出しあう	わかりやすい窓口（相談コーナー）困っていることを出しにくる場	身近なところで	車イス体験して大変さが分かった バリアフリー（町内全体）	立場を越えて知る
ハードルの低い少額補助	少額でも、補助金のニーズはある でも、成果まで求めるのは厳しい？	ハードルを低く 資金援助（補助金増） 気軽な…	“困っている”を知って課題を明らかに →そして目的を！		
NPOと町内会の協働を！	よそ者と町内会が仲良く分かりあえますように	町内会全体が高齢化 町内どうしの縁のつながり強化 隣接町内会連携	防災は家族内のコミュニケーションから！	昼夜家族ばらばら安否確認手段要検討	防災のためにとり近所とのコミュニケーション強化
NPOが解決したい課題を明らかにする	NPOが自分たちの思いを上手に伝えられるようになってほしい	明確な目的を持つ	NPOの資金循環を！ NPOで資金の流れをつくりたい		
NPO活動場所の提供を！	場所提供 e x. NPO等へ空き店舗				
広報あんじょうで市民活動紹介を！	広報あんじょうで紹介（情報共有）		町内会のITスキルU		もっとこの指とまれを！
IT（メールやSNS）の活用ができるように！	時代は進んでいます。 IT活用で連絡とれるようにする	70歳前後の方はボランティア中心		この指とまれの募集をしてくれる所がほしい	
学生のうちからのボランティア市民活動参加を	社会人の参加は難しい でも学生のうちに経験しておいてほしい	だれでも何かできることがある	若い世代 高齢者以外 の参加を！		多様性を活かす意識

協働の方向性(施策アイデア) 2つの一押し提案		グループ	A
1	町内会でも、多様性を生かそう。年代、職業、人、組織		
2	NPOは、思い・目的を上手に発信しよう。		
3			
4			
5			



**あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)** グループ B

	町内会が細分化しすぎているので、中学校区でまとめるコミュニティ会議をつくる				
	町内会長の認識に大きな差があると思われる		市民力を醸成するための円卓会議を各公民館で開催する	異年齢が交流できるプログラムがほしい	
	町内会長の半分を女性にする				
	地域でプロボノとして活動できる仕組みを地縁組織につくる	安城市は会社勤めの方を巻き込む会社を巻き込む	会社の勤務時間内に出してもらえると!!		

**協働の方向性(施策アイデア) 1つの一押し提案** グループ B

1	<p style="text-align: center;">中学校区を単位として</p> <p style="text-align: center;">とりあえず 円卓会議 をやってみる ← 走りながら考える</p>
2	<p>地縁単位を見直してみる</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>町内会長も勉強する</p> <p style="text-align: right;">参加者の半分以上を女性にする</p>
3	<p style="text-align: center;">異年齢が交流</p> <p style="text-align: right;">安城では会社も巻き込む</p>
4	<p>あと働きざかりの男性にも参加してほしいので</p>
5	<p>学区を越えて子ども達がつながりを持てる場</p> <p style="text-align: right;">年齢を気にしないで参加できるように</p>

<b>あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)</b>	<b>グループ</b>	<b>C</b>
--------------------------------	-------------	----------

<b>活動のサポート</b>					
<b>ヒト</b>	momoレンジャーのような伴走者の機能をまちづくりコーディネーターに取り込んで	NPOをサポートするNPOあるいはグループ	まちづくりコーディネーターを市から独立して組織する(NPO化する)	市の職員の中からもまちづくりコーディネーターのコースを受講して活動する	
<b>パシヨ</b>	困っている事の吸い上げ	地域円卓会議を組織する	地区ごとに円卓会議(住民会議)を開催する		
		民間型総合相談窓口必要	まちづくりコーディネーターが常駐する場所を増やす	居場所を市内100ヶ所ほどつくる	
<b>カネ</b>	活動場所無料 軽費はかかる	市版クラウドファンディング	コミュニティユースバンクmomoの広報(活動団体資金必要)		
	人員の確保 募集方法				
	住民履歴を利用するとまちづくりを实践できる				

<b>協働の方向性(施策アイデア) 一つ一押し提案</b>	<b>グループ</b>	<b>C</b>
-------------------------------	-------------	----------

<b>1</b>	
<b>2</b>	
<b>3</b>	
<b>4</b>	
<b>5</b>	

**あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)** グループ **D**

農業大学	日本のデンマーク復活	安城市に農業大学を設立しよう	安城市に農業専門学校を設立しよう	大学をつくる	
居場所	家庭内が変わる	地域(町内会)が変わる	町内会単位での交流まつり	町内会のあり方	地域交流会
	お隣りさん居場所	健康「安城」クラインガルテン	いつでも出かけて交流できる居場所	声かけ運動	
協働を進める					
イベント	市と町内と活動団体で「これぞ安城」の発信イベント	安城で活動している事を近隣の市と協働してイベントをうつ	一人ひとり、活動団体の協力イベント	ふれあい活動の充実	
人材発掘	市民活動をしてみたい人を巻き込むお試し(仕掛け)作り	若者があつまりやすいボランティア企画をやる(安城の若者のボランティアの意識を高める)	若者の地域ボランティア意識向上のためのイベント開催	性別に関係なく参加が可能	年齢に関係なく参加が可能
人材スキル活用	人材のスキル活用(資格、特技などを生かす)パソコン、企画、コーディネーターetc				

**協働の方向性(施策アイデア) 3つの一押し提案** グループ **D**

1	農業大学の設立
2	人材スキルの共有化のしくみ作り
3	お互い様支援活動
4	
5	

**あんじょうの協働の今後の方向性(施策アイデア)**

グループ

E

情報共有	当事者だけではなく、その先のもっと広い人たち皆で情報共有	情報共有のあり方 出し方 受け方	情報支援 地域の情報共有 SNSなどとの格差		
人の活用・発掘	地区の公民館（夜間）の活用 子ども高齢者のみ 中間層取り込み	ティーンズ集まれ	高齢者の活用	子育て世代との交流 地域とつながる	地域で中学生との交流
	マンション（アパート）に入居している人の状況把握することが困難である	外国人と地域連携			
	美化支援 道路の草刈 外国人のごみ出し支援				

**協働の方向性(施策アイデア) 2つの一押し提案**

グループ

E

1	情報共有のあり方をしっかりしよう！！ (情報格差を埋める支援、情報は一方通行じゃなくする)
2	高齢者だけじゃなく、中学生、子育て世代、外国人、町内会に入っていない人（マンション等）も地域活動、市民活動の大切な担い手！！上手く活用しよう
3	
4	
5	